

和歌山県イチゴ新品種

「まいひめ」

特性と栽培のポイント



2012年 3月

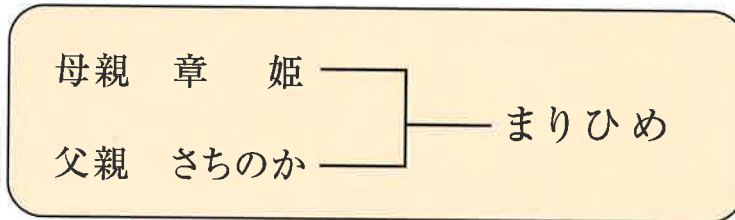
和歌山県農林水産総合技術センター農業試験場

1. 「まりひめ」の品種特性

1. 育成経過

主要品種「さちのか」に比べて、早生、多収であり、果実品質の高い促成栽培用品種の育成に取り組みました。平成15年春に、早生で多収の「章姫」を母親、コクのある食味で日持ちの良い「さちのか」を父親として交配し、得られた苗から有望な1系統を選抜しました。

平成20年3月に「まりひめ」と命名し、品種登録を出願、平成22年3月に品種登録されました。



2. 品種特性

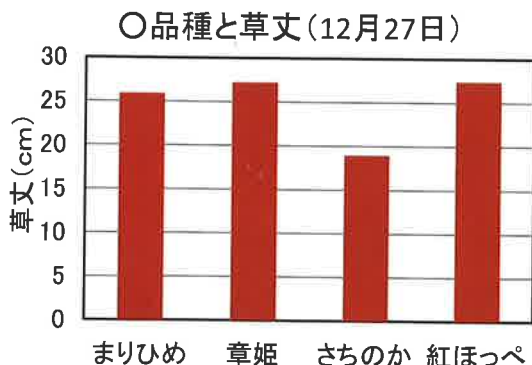
(1) 生育特性

- ・草姿は中間～やや立性。「さちのか」に似る。
- ・草勢が強く、草丈は「さちのか」より高い。収穫開始時期で25cm前後。
- ・ランナー、子苗の発生は多い。増殖が容易。
（「さちのか」よりやや少ない、80%程度）



(2) 花芽分化・開花特性

- ・花芽分化時期は、9月15日前後。「さちのか」より3～5日早い。
- ・開花開始は11月上旬、収穫開始は12月上旬。収穫開始は「さちのか」より2週間程度早い。
- ・頂果房の花数は約20個で「さちのか」と同程度。
- ・第一次腋果房の出蕾はやや遅く、頂果房との間に収穫の少ない時期がしやすい。



○品種と頂果房の開花、収穫開始時期

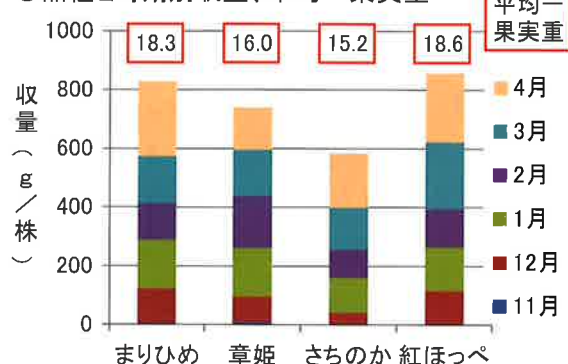
品種	開花始め (月/日)	収穫始め (月/日)
まりひめ	11/2	12/12
章姫	11/1	12/10
さちのか	11/13	12/31
紅ほっぺ	11/2	12/15

注) 2006～2008年の平均値。
普通ポット育苗。

(3) 収量特性

- ・頂果房の収量が多いので、12、1月の早期収量が多い。
- ・第一次腋果房の出蕾がやや遅く、2月に収穫の少ない時期（中休み）がしやすい。
- ・総収量が多い。「さちのか」の120%以上。
- ・果形の揃いが良い。奇形果・乱形果の発生は少ない。
- ・果実が大きい。平均果実重は、「さちのか」よりも大きく、「紅ほっぺ」とほぼ同等。
- ・2L・Lサイズの果実の割合が多い。

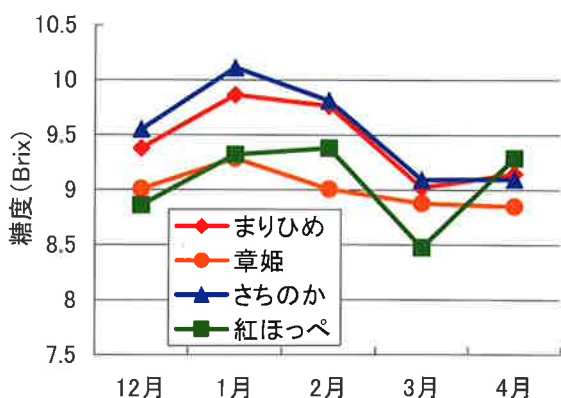
○品種と時期別収量、平均一果実重



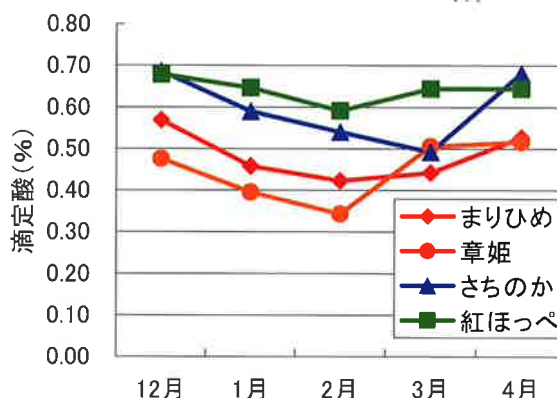
(4) 果実特性

- ・果形は肩部がやや丸みを帯びた円錐形。
- ・果実色は鮮やかな赤色。低温期でも着色が良い。
- ・糖度は高い。「さちのか」と同程度。
- ・酸度は低い。「さちのか」より低く、「章姫」よりやや高い。
- ・輸送性、日持ち性は十分。果皮・果肉の硬さは、「さちのか」より軟らかく、「章姫」より硬い。

○品種と時期別糖度



○品種と時期別滴定酸



(5) 病害虫抵抗性

- ・特定の病害虫に対する抵抗性は持っていない。
- ・炭疽病には弱い。育苗時からの発生防止対策が必須。
- ・その他の病害虫に対しても、「さちのか」と同様に防除する必要がある。

(6) 生理障害

- ・心止まり株の発生がみられる。心止まり株は果房が連続して発生し、その後の腋芽（生長点）が分化しないため新葉の発生が停止する症状で、収量低下、果実品質低下を引き起こす。発生した場合、腋芽や近くの株のランナーを誘引し、頂果房収穫後に株を切り替える。

II. 「まいひめ」栽培のポイント(育苗期)

- 炭疽病防除の徹底
- 若苗定植が可能

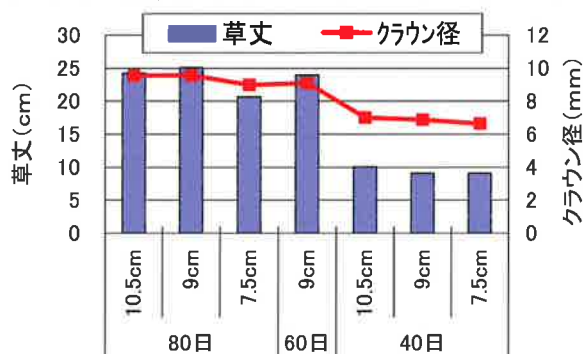
1. 親株

- ・親株は、本圃 10a (子苗 10000 株) あたり 200~300 株を準備。
- ・親株 1 株からの採苗数は 30~50 株程度。「さちのか」の約 80%。
- ・親株は病害の感染していない苗を準備する。

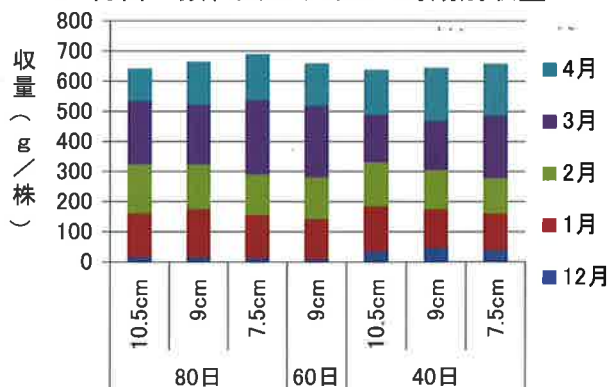
2. 採苗

- ・ポット育苗が基本。地床での無仮植育苗は、炭疽病の発生リスクが高いため不適。
- ・若苗定植が可能。若苗(小苗)でも収量は変わらない。
- ・ランナーのポット受けは 6 月上旬~7 月中旬、切り離しは 7 月上旬~8 月上旬頃とする。
- ・ポットのサイズは 7.5~10.5cm のいずれでも可能。収量に大きな差はない。

○育苗日数、ポットサイズと定植時の苗の生育



○育苗日数、ポットサイズと時期別収量



3. 苗の管理

- ・施肥は置肥が基本。ランナー切り離し(活着)後、IB化成の場合、2粒程度を施用。
- ・心止まり株が発生するので、育苗後半に窒素が切れすぎないように注意する。
- ・普通ポット育苗での窒素切りの時期は「さちのか」よりも遅い、8月中下旬頃とする。
- ・置肥の肥効が早く切れすぎる場合には、液肥で追肥をおこなう。
- ・苗が混み合わないよう苗間隔を広げ、風通しを良くする。
- ・苗が老化しないよう、葉数 3~4 枚になるように、葉かきを行う。

○窒素中断時期と定植時(9月14日)の苗の生育、花芽発育段階、心止まり株発生率

窒素中断時期	草丈 (cm)	クラウン径 (mm)	花芽発育段階		心止まり株発生率 (%)
			9/17	9/22	
8月下旬	17.7	8.0	0,0,0	2,1,1	0.0
8月中旬	14.6	7.2	1,0,0	2,1,1	6.3
7月下旬	12.4	6.6	1,0,0	2,2,2	6.3
無施肥	9.9	5.6	1,1,0	4,3,1	8.3

注)花芽発育段階:0未分化,1分化初期,2花芽分化期,3果房分化期,4萼片形成期。

4. 低温処理育苗

- ・夜冷短日処理の花芽分化促進効果は安定している。ただし、11月上旬までに収穫を開始する早期の作型では、第一次腋果房の分化が遅れ、1、2月に収穫の中休みが生じやすい。
- ・暗黒低温処理の花芽分化促進効果は不安定である。原則として行わない。

○夜冷短日処理と花芽発育段階、頂果房の開花日、収穫開始日

品種	夜冷短日処理	花芽発育段階						頂果房	
		8/22	8/25	8/28	9/8	9/11	9/16	開花日 (月/日)	収穫開始日 (月/日)
まりひめ	有	1,0,0	3,1,1	3,2,2	-	-	-	10/4	10/31
	無	-	-	-	1,1,1	2,1,1	-	10/29	12/7
さちのか	有	2,1,0	3,2,1	2,2,2	-	-	-	10/8	11/9
	無	-	-	-	0,0,0	-	1,1,0	11/6	12/21

注)夜冷短日処理:8月1~27日、庫内温度;15℃、処理時間;17時~9時(8時間日長)。

定植日:夜冷有;8月28日、夜冷無;「まりひめ」9月12日、「さちのか」9月17日。

花芽発育段階:0未分化、1分化初期、2花芽分化期、3果房分化期、-は未調査。

5. 育苗中の病害虫防除

- ・病害虫は薬剤のみで防ぐのは難しいので、育苗環境を改善し、総合的防除を心がける。

<炭疽病>

- ・炭疽病に弱いため、徹底的な防除が必要。
- ・育苗ほ場は、排水、風通しを良くする。
- ・イチゴの残渣等を放置せず、しっかりと除草を行い、ほ場環境をクリーンに保つ。
- ・無病の親苗を準備。親株からの一次感染を防ぐ。
- ・ベンチ育苗、雨よけ育苗、底面給水育苗は予防効果が高い。
- ・多湿条件により発生しやすいので、葉かきやポット間隔を広げ、株周辺の風通しを良くする。
- ・薬剤防除は予防散布が基本。親株定植期から定期的に行う。また、葉かき作業後、雨天後は重点的に防除。(予防効果の高いジマンダイセン水和剤、アントラコール顆粒水和剤、バルコート水和剤を中心にローテーション散布。ゲッター水和剤、アミスター20フロアブル、セイビアー20フロアブルは浸透移行性があり、防除効果が高いので、葉かきや台風後、定植前などに基幹薬剤として使用する。ただし、アミスター20フロアブルは近年、耐性菌の発生が確認されており、防除効果が低下している。)
- ・炭疽病の発生をみたら発生株とその周辺の株をすぐに除去し、ほ場から持ち出す。



ベンチ育苗+雨よけ

<その他病害虫>

- ・ウドンコ病、ダニ、アブラムシ、ハスモンヨトウは育苗時に多発させないように、適正に防除し、本ほへ持ち込まないようにする。

Ⅲ. 「まいひめ」の栽培のポイント(定植～頂果房開花期)

- 基肥を控えた追肥重点型の施肥体系
- 株をコンパクトに作り、第一次腋果房の分化を促す

※ポイント

- ・草丈の目標は、頂果房開花期に 20cm、頂果房収穫期に 25cm。
- ・定植～頂果房開花時期に葉が徒長し過繁茂になると、第一次腋果房の開花が遅れ、さらに、厳寒期や春先の成り疲れや果実品質低下にもつながる。
- ・基肥量を控え、温度を低く保ち、コンパクトな株を育成。

1. 基肥

- ・基肥を少なくし、年内の徒長を防止し、第一次腋果房の開花を促進する。
- ・基肥量が多いと頂果房の開花時期は早くなるが、第一次腋果房の開花時期は遅れる。
- ・「さちのか」の半分～3分の2程度、窒素分量で 5～10kg/10a 程度が目安。

○基肥と頂果房、第一次腋果房の開花、収穫開始時期

窒素 施用量 (kg/10a)	頂果房		第一次腋果房	
	開花始 (月/日)	収穫始 (月/日)	開花始 (月/日)	収穫始 (月/日)
0kg	11/23	1/16	12/28	2/22
6kg	11/21	1/12	12/21	2/17
12kg	11/18	1/9	12/25	2/21
24kg	11/13	1/2	12/30	2/24

注)定植日:2009年9月15日、基肥資材:有機配合ペレット。

2. 定植時期

- ・花芽分化時期は 9 月 15 日前後。花芽分化を顕微鏡で確認のうえ定植する。
- ・早植えは避け、9 月 15 日以降の定植とする。
- ・花芽分化期前後に栄養状態が悪いと、心止まり株が発生しやすい。極端な窒素切りを避け、花芽分化確認後は液肥等により栄養状態を良くする。
- ・栽植密度は畝幅 120cm、株間 20～25cm 程度(「さちのか」よりやや広め)が基本。
- ・定植後は苗の活着、クラウン部からの不定根の発根を促進するため、畝表面(特にクラウン周辺部)を乾かさないう、こまめに灌水する。
- ・活着後は徐々に灌水間隔を広げ、徒長防止と第一次腋果房の分化促進を図る。

3. 被覆・保温開始時期

- ・マルチ、天ビニルの被覆時期は、第一次腋果房の花芽分化を考慮し、10 月 20 日以降。
- ・定植前または早い時期からマルチを被覆する場合は、地温が上昇しにくい白黒マルチを利用する。また、定植時から天ビニルを被覆する場合は、遮光資材等を利用し、ハウス内温度の上昇を防ぐ。
- ・保温は最低気温が 10℃を下回る頃から行う。保温開始後も日中の気温は 23℃を超えないよう、また、夜温が高い日はハウスサイドを閉めきらない等の工夫をし、ハウス内が高湿とならないようにする。

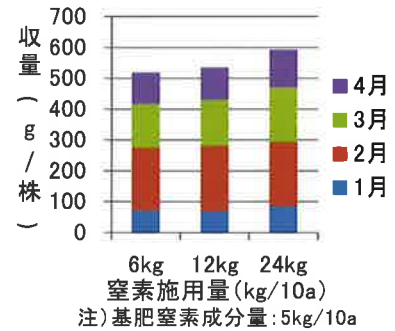
IV. 「まいひめ」の栽培のポイント(収穫期)

- 追肥をしっかりと
- 摘花(果)により品質向上
- 春先の果実軟化に注意

1. 肥培管理

- ・ 基肥量を少なくした分、追肥を十分に施用する。
- ・ 1回目の追肥は緩効性肥料を用い、10月下旬に窒素成分量で5kg/10a程度を施用。
- ・ 11月中旬以降は液肥を用い、窒素成分量0.5kg/10a程度を、週に1回程度施用。
- ・ 乾燥や過湿のストレスを与えないよう灌水管理に注意する。また、低温期の灌水は地温の低下防止のため晴天日の午前中に行う。

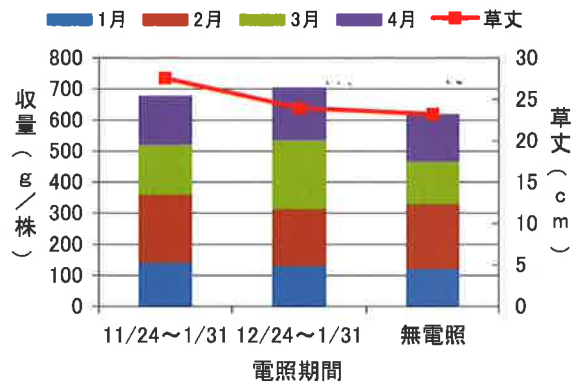
○追肥量と時期別収量



2. 草勢の維持

- ・ 低温期の草丈は25cmが目標。
- ・ ハウス内気温は午前23℃、午後20℃、夜間は最低5℃、朝夕はできれば最低10~12℃を確保。
- ・ 電照は、徒長の心配がなくなる12月下旬~2月初旬に、3~4時間程度の電照を行う。県南部の日照条件の良い場所では不要。
- ・ 3月以後はハウスを解放し、温度上昇を抑える。

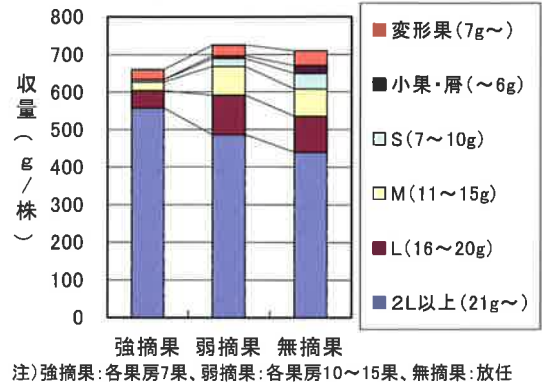
○電照期間と草丈(1/31)、時期別収量



3. 摘花(果)

- ・ S級以下を摘花し、LM級以上収穫が目安。
- ・ 頂果房は10~15花、第一次腋果房以後も、株当たり10~15果程度とする。
- ・ 弱小果は奇形果になりやすいので、果数が10果未満となる場合でも摘花する。

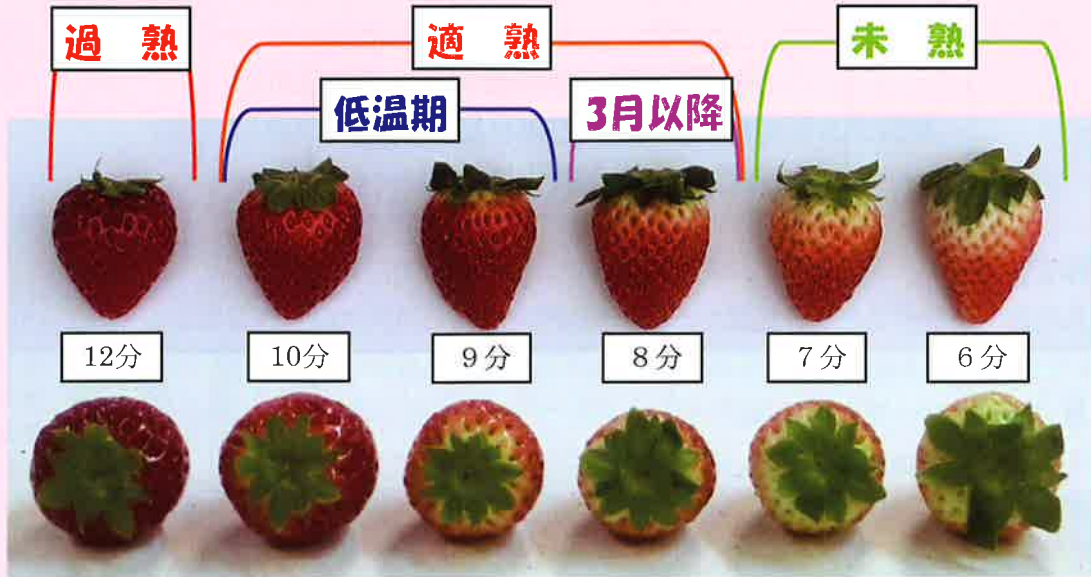
○摘果程度と階級別収量



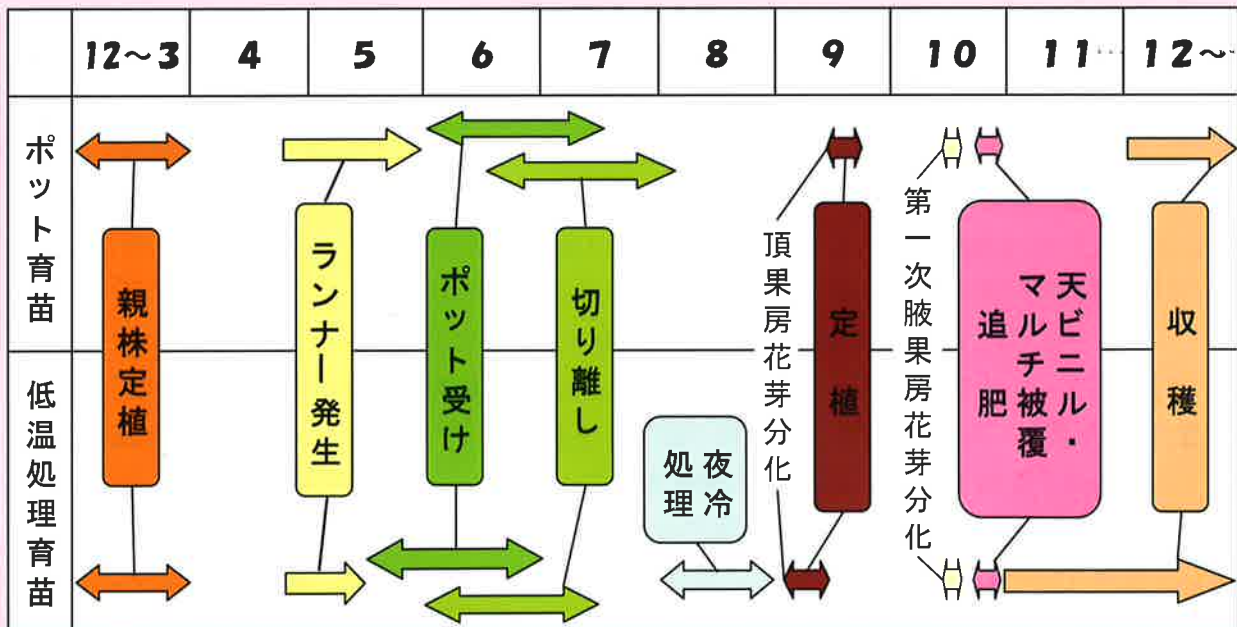
4. 収穫

- ・ 収穫はカラーチャートを参考に基準を遵守する。
- ・ 低温期は10~9分着色、10月以前や3月以後は8分着色程度が目安。
- ・ 3月以後は日持ち性向上のために、気温が低い早朝に収穫し、出荷までは予冷庫等を利用し、果実温度の上昇を防ぐ。

○「まいひめ」の着色過程



○「まいひめ」の栽培歴



編集・発行

和歌山県農林水産総合技術センター 農業試験場

〒640-0423 紀の川市貴志川町高尾 160 TEL 0736-64-2300

ホームページ <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070109/gaiyou/001/001.htm>